

中日比較文化研究
—黒龍江省の事例を中心に—
(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学籍番号 : D101617

氏 名 : 陳 大陸

本論文は、比較文化学の視点から中国の最北部に位置する黒龍江省と日本との関わりに着眼し、歴史を通して、現状を見つめ直すことによって黒龍江地域と日本の共同発展を模索するものである。黒龍江省は日本帝国主義の統治下に置かれ、制圧された時代もあれば、日本知識人の援助を受け入れたこともあった。いわば日本と特殊な関係で結ばれている地域である。近代史上において、黒龍江省と日本との間には多くの恩恵とそれに反する恨みとが混在しており、戦争が残した爪痕は今なお多くの人々の心に潜んでいる。また、中日両国民の歴史と文化に対する認知の違いは、極めて大きいとも言える。こうした歴史を背景に、今日の中国と日本との関係を比較文化的な角度から考察するのが本研究の目的である。

まず、初期の黒龍江省と日本に関わりを中日両国の史料によって振り返ってみる。今からおよそ 1300 年前、当時、黒龍江省地方は渤海国と言われ、唐王朝から渤海郡王に封ぜられ、その文化を模倣した。西暦 727 年からしばしば日本と通交があり、相互に使節を派遣する形跡も伺える。737 年、渤海国王であった大武芸が死去した後、文王・大欽茂が即位した。彼は偃武修文（軍隊や武装を減少し、文明や宗教を見直しながら国家建設に力を注ぐ）の政策を取り、時勢に応じながら周辺の隣国と友好関係を保った。そのため、渤海国の全盛期を迎えることができ、日本との交流もまたさらに強化され、友好関係を深められたのである。渤海国と日本の関係は歴史上において長い間、原則に基づきながら平等かつ友好に交流を交わしていた。この間に渤海国は訪日を通して日本の先端科学技術を学び、航海技術が大いに発展した代わりに、日本へ暦法や医薬を伝え、特に暦法は日本に大きな影響を及ぼし、中世を通じて 823 年間継続して使用された。

渤海国は日本との文化的交流は範囲と内容の双方にわたりとても広く、深

く関わっていた。当地区から日本までの海上往来の最短距離航路の開通により、黒龍江地区と日本との文化的交流や両国の民衆的友好の基礎が築き上げられたと言える。これにより黒龍江地区と日本との外交関係史において輝かしい一頁が書き記された。だが、両国の交流関係は常にスムーズな状態で行われたとは言い難い。この期間の史料をまとめることによって現代を生きる我々が必ず何らかの啓発を得ることができるし、これらの啓示もまた将来的な国際コミュニケーションの不十分な点を補うことができると思われる。

だが、渤海国は唐の滅亡とともに消滅し、その後の五代十国の時代は戦乱が絶えず、中国全土が混戦状態に陥っていた。同時期の日本は鎖国体制に突入し、自ら国舞台から遠ざかっていた。遼国、元朝、明朝、清朝になっても両国はともに鎖国体制を取っており正常な国交はなかったため、相互間の経済、文化面の交流規模は極めて小さかった。こうした状態は西洋の甲鉄艦や大砲によって鎖国の扉をこじ開けられるまで続いた。

このように近代までに遡ってきたが、再び黒龍江省の地に日本人が足を踏み入れたのが「日露戦争」であった。勝利を収めた日本は、長春から大連までの中東鉄道を管轄下に置き、さらに北満まで勢力を拡張した。後にハルビンで日本領事館を設立し、日本人移民も著しく増加した。また、ロシア人を牽制するためにロシア人移民事務局を設置し、ロシア人の黒龍江省への移民を制限した。「満洲国」建国以後、日本人の大陸移民が本格化し、後の日本開拓民の逃避行による大惨事を招くこととなった。

終戦の翌年に引き揚げ命令が出され、引き揚げ船の出る葫蘆島港には日本人が続々と満洲各地から終結した。開拓団約 27 万人のうち、その帰還率は 3 分の 1 にも満たしていなかった。そして帰還者の 80%以上が婦女子であった。

この逃避行によって黒龍江省の方正県に建てられた中国唯一の日本人殉難

者を祀る「日本人公墓」の由来と意義を追求し、このことが後世の私たちに何を語りかけているのかを見出すことによって戦争の残酷さと平和を望む両国の民衆の思いに着目する。省都ハルビンから東に約 180 キロ離れた方正県は当時の日本人移住者はそれほど多くはなかったが、開拓団本部のある伊漢通村（当時の日本名：吉興村）が近くにあるのと、入満した当初、方正を経由してソ満国境近辺に入植させられた開拓団が多くいたため、1945 年 8 月 9 日のソ連軍進攻に伴い避難民はいっせいに方正県に集まった。開拓団の青壮年男子はほぼ全員が軍隊に召集されており、徒歩で方正に向かう老幼婦女子だけとなった避難民は戦闘や現地農民の襲撃、悪路などで多くの人が生命を失った。方正県収容所に集まった難民の数は約 2 万人といわれ、その半数以上が飢餓と伝染病によって死亡したという。生存者の多くは残留孤児や残留婦人として現地中国人に何らかの形で引き取られた。そして 1963 年に残留婦人であった松田ちゑが砲台山の麓で白骨の山を見つけ、中国政府に埋葬と墓の建立を請願したところ、周恩来の認可を得て、人民政府の手によって墓碑が立てられた。しかし、中国が日本人殉難者のために公墓を建立した意義は、中日両国で一般に広く知られることなく、2011 年、中国黒龍江省方正県にある日本人開拓団の共同墓碑が破損される事件によって、中国国内のネット上で論争の的となり、中国で多くの若い世代はこの事件によって初めて中国にある「日本人公墓」のことを耳にしたかもしれない。だが歴史認識の相違によって、この公墓の本来の意義が失われ、ここで改めて「日本人公墓」の由来と経緯を紹介し、戦争が我々に残したものを再考する。

最後に、かつて開拓や生活、勉学または訪問などの形で黒龍江省と何らかの関わりを持ち、当地域に影響を及ぼした日本人たちに焦点を当て、黒龍江省が日本語・日本文化といかに関わっているのかを考察する。1980 年に日本

民間友好団体が方正県の中日友好園林を訪問した際に、当時 68 歳であった水稲専門家、藤原長作は園林内の日本人公墓に心を打たれ、彼自身は侵華戦争に参加しなかったにもかかわらず、中国人民に謝罪の意を表した。その後、10 年に渡り先進の稲作技術を方正県はじめ、中国東北全土に無償で伝えた。藤原が逝去したあと、中国政府は彼の生前の中国に対する功績を頌えるために中日友好園林に慰霊碑を建立し、「藤原長作記念碑」と名付けた。

黒龍江省と日本の交流史を辿れば、まさに波乱万丈といえる。新中国成立後、その関係は中日国交正常化によって中国で最初に民間の中日友好団体が出現したことを皮切りに、残留孤児帰国の現象、日本文化に接触した若者たちの間に日本語学習の旋風が巻き起こって、多くの人々が日本への留学に関心を持つようになった現代に至る。

また、黒龍江省は石油や石炭、木材など天然資源が豊富なため、ソ連の技術援助もあって新中国成立初期から重工業が発展してきた。しかし、ソ連技術者の撤退と国有企業の不振により経済状況は長い間、停滞していた。『中国統計年鑑 2006 年』の統計によれば 2005 年度の全中国レベルで見た黒龍江省の経済的実力は、31 の省・自治区・直轄市の中で GDP は 5510 億元で 13 位、工業生産額が 10 位、1 人当りの GDP は 1 万 4467 元で 12 位（中国全体での 1 人当りの GDP は 1 万 3985 元）に達しており、主要な経済規模では、中位以上の位置を占めている。いわゆる沿海地区の省、直轄市を除けば内陸に属する省でトップの水準である。広大の平原を背景に農業も盛んで、中国でも有数の穀倉地帯となっている。大学などの教育機関が多く、人材も豊富であり、特に理工系や外国語系の学生が集中しているが、外資系企業が少なく、人材の流失が特に目立っている。

今までの黒龍江省の貿易相手国として日本はロシア、韓国に次ぐ 3 位であ

ったが、それは輸送ルートで大連港を利用するため、大連までの輸送コストが問題視されていたからである。だが、近年の図們江開発計画によって黒龍江省に近い琿春市の地理的特殊性を活かし、ここから日本海経由のルートを開拓する計画が実行されつつある。黒龍江省は日本とは距離的には近いのだが、日本海側に面しておらず、航空機の直行便も少ないことから、これまでにあまり貿易交流の対象として重要視されてこなかったが、当地区の天然資源と人材資源の豊富さから見れば、その潜在力は計り知れないものである。さらに日本海ルートが開通すればまさに渤海国時代のような交流が 1300 年を隔てて再び全盛期を迎えられると思う。

【図 1】 琿春経由と大連経由の輸送路比較



出所：アジア四季報「中国東北部とロシアとの国境貿易の現状」

こういった黒龍江省人民と日本が更に広範囲にわたり共同発展していく時期の真最中であって中日関係に再び亀裂が生じている。すなわち釣魚島（尖閣諸島）問題は両国に新たな試練を突きつけているのだ。その影響で政治活動だけでなく、教育や経済面のイベントなども中止される始末であった。中日関係の悪化は両国にとって深刻な問題であり、発展の妨げとなることは疑うべくもない。政府首脳陣・知識人は両国民の利益を尊重し、局部の争いで全体の利益をおろそかにしないように務めなければならない。また、教育面において永久的な友好関係を持続すべく、互いに心から友好関係を促進できるような人材育成をすることが共存共栄の第一歩と考える。

黒龍江省では、旧日本軍の毒ガス兵器処理の問題もあり、過去の戦争の関連で一般人の考え方、歴史認識は日本人とは大きくかけ離れている。だが、日本人と接したことのある中国人はほとんどがその真面目さや思いやりなどに感心し、日本人の考え方や歴史認識をよく理解している。本論で見てきた歴史の真相を如何に多くの世の人に知ってもらい、理解してもらうことによって、中日両国民の歴史に対する相違点を可能な限り埋めることが今後の課題と考える。